高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点を生かした学習指導の在り方（第１年次）
～高等学校における学習指導実態調査と授業の提案～

福島県教育センター　調査研究チーム　主任指導主事　酒井　康雄

１　研究の趣旨

現在、推進されている高等学校教育改革の中で、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習・指導方法の改善が掲げられている。特に、小・中学校において実践が重ねられてきたグループ活動や探究的学習等の学習・指導方法の工夫の延長上に、学習・指導方法の抜本的充実が求められている（平成28年３月31日　高大接続システム改革会議最終報告）。また、本県教育庁高校教育課においては、平成29年度から「復興を担うアクティブ・ラーナー育成事業」を推進し、授業改善に取り組んでいる。

本チームでは、平成28年度から２年間、研究主題「『思考力』を高める問題解決的な学習指導の在り方」のもと、小学校における国語科及び算数科を対象に、アクティブ・ラーニングの視点を生かした授業改善の提案に取り組んできた。新学習指導要領において、小・中学校及び高等学校の連携が「接続」と表記され、校種を越えた接続が重要視されている今、これまでのチーム研究の成果を高等学校の授業改善に生かす絶好の機会と考えた。このような経緯から、小・中学校及び高等学校の12年間の子どもの学びの積み重ねを生かし、小・中学校の授業づくりを生かした高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点を生かした授業改善の在り方に焦点を当て、研究を進めたいと考えた。

２　研究の概要

本研究は、２年計画の１年次である。以下の研究内容に基づき、高等学校における授業づくりの具体的なイメージや授業改善の視点を明確にし、発信する。

⑴　高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点による学習指導実態調査

小・中学校との接続の視点から、小・中学校における授業改善の視点を生かしたアンケートを作成する。その後、ＦＣＳメールを活用し、授業を担当している教員を対象に実施する。

⑵　研究協力校における小・中学校の実践を生かした授業実践

研究協力校を福島高等学校とし、国語科、数学科及び理科の授業実践を行う。

３　成果と今後の課題

⑴　研究の成果

①　高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点による学習指導実態調査

ア　アンケート回答者（1,931人）の協力により、以下の傾向を捉えることができた。

・　アクティブ・ラーニングの視点を取り入れ、授業改善をしている（または、したいと思う）と回答した教員は、回答者の92％を占める。

・　アクティブ・ラーニングの視点を取り入れるよさとして、言語による表現力やコミュニケーション能力の向上を理由に挙げている教員は、回答者の70％以上を占める（複数回答）。一方、中高接続、高大接続に必要な学習スタイルと感じている教員は、20％以下である（複数回答）。

②　研究協力校における小・中学校の実践を生かした授業実践

ア　生徒から疑問を引き出す課題を設定することにより、生徒自ら課題に取り組もうとする意欲的な姿を見ることができた。

イ　単元内に実社会や日常生活との関わりを見いだし、必要感や有用感を味わわせる時間を位置付けたことで、学習内容への興味・関心や活用への意欲を高めることができた。また、知識を確実に身に付けていくことの大切さを実感させることができた。

⑵　今後の課題

①　小・中学校の子どもの学びを高等学校に生かす工夫として、自分なりの考えを明らかにするとともに、対話活動を通してその考えを多角的に問い直す活動を一層重視する必要性がある。

②　教科等で育成する資質・能力や、教科等を横断する資質・能力等を育成する上でも、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した授業づくりの具体的な提案を行う必要性がある。